

教え子と教職員が語るベーツ先生

2017年5月26日は、カナダ人宣教師、C. J. L. ベーツ第4代院長(1877-1963)の140回目の誕生日です。スクールモットー”Mastery for Service”の提唱者として知られるベーツ先生はどのような人物だったのでしょうか。教え子や共に働いた人びとの言葉を集め、振り返ってみたいと思います。

(学院史編纂室 池田裕子)

◆ 詰め込みでなく、学生の人格を認め、自主的にのびのびと育てていただいたことがありがたく、またなつかしい。ベーツさんは、授業前に、「good morning gentle men」と呼びかけて下さった。「We have no fence in our School」とも、おっしゃった。チャペルを失敬しようとしている者に出逢うと、「It is a wrong way」と、笑いながらいわれた。当時流行[歌]の「It is a long way」をしやれておっしゃったことはいうまでもない。

このような“垣”のない原田の森で、自由に羽を伸ばさせて下さった。この強い羽根のおかげで、社会に出てからヘタバルこともなかった。軍国主義的官僚教育で押さえつけられていたら、今日の私はあり得なかった。ありがたい。

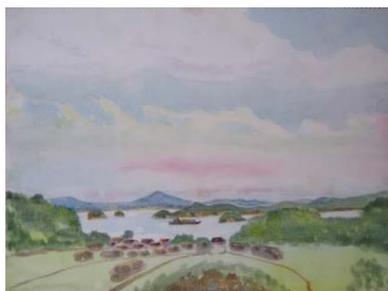
坂本遼「七十周年に憶う」、『母校通信』第22号、1959年10月、25頁。坂本は文学部を卒業した1927年、詩集『たんぼぼ』を刊行した。

◆ ”When did you graduate from the middle school?” “I graduated forty years ago.” “How old are you, then?” “I am twenty-four years old”

学院の入学試験でベーツ先生と私との間に交はされた問答である。二昔以前のことであるが私には昨日のことのやうに思へる。それ程私の頭に印象深く刻み込まれていたのである。ベーツ先生と同席された試験官池田先生(神戸一中校長)とがどつと爆笑されたので私はふと気が付き早速、”I was mistaken. It is four years ago instead of forty.”とやった。今思ひ出しても顔が赤くなる。人物総評に bright と書かれるのをぬすみ見て心私かに喜

んだのは勿論である。

大杉信夫「学院生活の断片」、『関西学院学生会抄史』、1937年、108頁。大杉は1920年高等学部(商科)卒業。



Matsushima



◆ ベーツ先生にはいろいろお世話になった。いかにも名門の出らしい人柄で、学生を愛し、敬虔な祈りをする人であった。入学した年の夏、父が死んだので、わたしは第二学期を休学し、新年になってから、ベーツ先生の所へ将来のことを相談に行った。そのとき内心では退学の決意をしていたのである。先生は授業料を免除するから学業をつづけるようにと、懇々とさとして下さった。その言葉に動かされて退学を思いとどまったのであるから、わたしの学院卒業は先生のご好意の賜物であると云わなければならぬ。

由木康「原田時代の師友寸描」、『関西学院七十年史』、1958年、451-453頁。1920年高等学部(文科)卒業の由木はパスカル研究者として知られる。讃美歌「きよしこの夜」の訳詞者でもある。

◆ ベーツ先生の英語は田舎者の私にも一番わかりやすかった。先生は生徒を一人づつ呼び出して、先生の暗誦せられる詩などを黒板に書かせた。暗誦も随分やらされた。何れもよく出来ても出来なくても大概ほめて下さるので生徒は喜んだ。

芥川潤「あの頃のクラス」、『文学部回顧』、1931年、298頁。1913年4月から翌年10月まで高等学部(文科)で学んだ芥川は、のちに中学部、文学部、商経学部で教えた。

◆ 私達はいつも学院生活の経験したことを誇りとしていますし、真の意味の教養を得たことを感謝して居ります。私は入学式の時ベーツ院長の式辞の一番初めに発せられた言葉を今もハツキリ記憶しております。

Now You Come to Kwansai Gakuin to Learn Knowledge and Know Yourselves.

その言葉は簡単ですが関学精神をもつと単的に表現しているものと学院生活の思ひ出の第一において今も大切にしているものです。

氏名不詳「会員放談」、『母校通信』第5号、1950年5月、28頁。

ベーツ院長の執務室(旧院長室)に「関西学院五十周年記念」(1939年11月3日)写真を飾りました。時計台を背に、ベーツ院長と教職員、学生・生徒が集結した迫力あるパノラマ写真です。創立125周年に際し、アメリカとカナダの駐日大使(キャロライン・ケネディさんとマッケンジー・クラグストーンさん)から頂戴したメッセージと共に飾っています。見学を希望される場合は、前もって学院史編纂室にご相談ください。

◆私は大学では商経学部に進んだが、商経学部の必須科目に「英文学」というのがあったのは驚いた。あとで聞いた話によると、これはベーツ院長の強い要望で、商経学部といえども、専門学科以外に大学生としての教養をつけるために設けられたということであった。

山田重迪「ああ、わが恩師たち」、『クレセント』第3巻第2号、1979年9月28日、128頁。山田は1938年商経学部卒業。

◆先生は「私の名前はベーツに(べつに)意味はありません」とか先生自身結腸(colon)を手術されて、半分ぐらい切っているそうですね。それで「私の身体はセミコロン(semicolon)です」というような冗談を良く聞きました。

「ベーツ先生思い出座談会」における寿岳文章の発言、『母校通信』第31号、1964年5月、41頁。1923年高等学部(文科)卒業の寿岳は、のちに文学部等で教えた。写真:法文学部卒業アルバム、1938年。



◆「マスターリー・フォー・サービス」の説明を先生に伺ったが「真理は汝をして自由たらしめる。」わざわざ漢訳の聖書を取られて、「真理は我々を自主たらしめる。自主とはセルフ・マスターリーである。真理を得て自主的な人間になる。これが教育だ。学院教育である。そしてその教育の目的は奉仕である。真理…自主…奉仕、そこで「マスターリー・フォー・サービス」といわれたわけである。

先生は真理探究の自主性を重んぜられた。先生の態度は寛大・人格尊重・調和・協力が特徴であられたと思う。

河辺満穂「恩師ベーツ先生のことども-学院教育にふれつつ-」、『学院を語る』、1965年、10頁。1919年高等学部(文科)卒業の河辺は、戦後、高等部初代部長を務めた。

◆終戦の年に在職二十三年目で関学を退職し、その後、今日に至るまでに二十三年の歳月を経たが、在職当時接触した先輩同僚の個人々々の思い出は興味津々として老の目覚めを楽しませてくれる。中でも深い信仰と博覧、機知をユーモアでつつんだベーツ先生のことは、しばしば夢に見ることすらある。先生の口から直接聞いた先生と日本の知名人との交渉を何かの参考にもと書いて見る。

内村鑑三 ある年の軽井沢帰りの汽車の中で内村氏を見かけ、刺を通ずるといきなり「あなたはなぜ

私を訪問しないんですか」ときかれ「あなたはわれわれ宣教師にはなかなかきびしいと聞いているものですから」と答えると顔を上向け「アハハ…」といかにも心持よげに大笑いされたそうである。

里見純吉 終戦の翌年、同氏から直接聞いた話。「昭和十五年のクリスマスの直前、ベーツ先生は帰国のあいさつに来たと社長室で白髪を深々とたれ長いこと祈禱して帰られた。歳末で人出入りの繁忙な社長室に静かな祈禱を残して行かれた」

日独伊の三国同盟成立発表のあった日の午後、偶然、院長室の前を通ると、階段の所で呼び止められ“Japan made a great mistake.”とどなりつけるようにいう。こちらはいずれ何とかなるだろうぐらに考えていたので軽くあいさつすると、『君達だまっている法があるか、何とかし給え。大変なことになるゾ』と繰り返された。そのとおりの大変なことになったのである。

国際連盟脱退さわぎのころ、松岡外相が米国記者団に、アメリカに対して”Mind your own business.”といったことを取り上げ、先生は「松岡さん

は英語を知らない。あんな言葉はいうべきものでない。とりわけ外交官の言葉ではない」

大藤豊「ベーツ先生の思い出先生と交渉のあった知名の人々」、『母校通信』第38号、1967年秋、19頁。大藤は文学部等で教えた。写真:法文学部卒業アルバム、1938年。



◆大学が事務管理に追われているようでは本当の大学にはなれぬ。…ベーツさんはいろんなときに、学校の困難な問題があっても、その使命を果たされるという信仰的なものがあつたと思うんです。そういう一つの信念が、学院の基本的なものとして動いていかなければならないということを感じましたね。ベーツ先生の大きな手で握られると、先生の建学の精神が身にしみて各部各部の事務的なハンサさんか乗り越えていかねばならぬと思いました。

「上ヶ原を語る座談会」における宇都宮信哉の発言、『母校通信』第32号、1964年10月、23頁。1931年神学部卒業の宇都宮は、のちに商学部宗教主事を務めた。写真:商学部卒業アルバム、1962年。



◆其の時代の学生会は一つの伝統的な問題を持って居た。言ふ迄もなくこれは大学昇格問題であつたのである。拾数年に涉つて、毎年の如く学院当局に対して猛運動がなされた。けれども所詮問題が大詰めとなつたのは、私たちの時分であつたと言つても差支へない。

…かくて右の学生大会が三日間連続して開かれたが、其の結果、吾学生会は次の決議文を満場一致で可決した。其の内容は即ち吾学院は仁川に移転する事に依り、完全に大学昇格の準備は出来た。…須らく今日断々乎としてベーツ院長をアメリカに送り在米合同理事会に出席して、昇格問題の達成貫徹の為に折角努力して欲しいと言ふ意味のものであつた様に記憶して居る。…吾々は決然として、心持昂奮されて居つた、ベーツ院長に右の決議文を院長室で手交した。…長い沈黙の後、終にベーツ院長は次の如く云はれた。「若しも私が米国に渡つて此の事が成功しなければ再び学院に帰つて来られない訳ですね」と。…私は涙を呑んで「正に然り」と答へて後は穴でも入り度い気持で頭を下げた。…いきつまる様な数秒の緊張が続いた後、ベーツ先生のいつもの温顔が俄かに引きしまつた。さつと顔色が蒼くなつた。

”It is the bad Policy” 力強い而も大きい声が私達の前に吐き出された。…かくて決議文を叩きつけたその夜のことである。…曾木先生の御宅へその日の理事会の模様及びベーツ院長の渡米問題の結果を伺ひに行つた。重い足が冷え切つた夜の上ヶ原に運ばれた。然し御宅の玄関先で曾木副院長から「ベーツ院長は到頭大学昇格問題をひつさげて、本月末日渡米されることに理事会で決つたから安心して給へ」ときかされた時…、三人は玄関でわあわあと大声を上げ、涙を流して泣いたものである〔。〕曾木先生も一緒に貰ひ泣きをして下さつた。続くその足でベーツ院長宅を訪問、今朝来のご無礼を段々と詫び、これも学院を愛するためやつたことであるから不悪了解して頂き度いと述べた。其の夜は月明りで先生の温顔も一層優しく輝いた。「いよいよアメリカ行きを決めました」。かう語られるベーツ先生には、何か深く決意せらるゝものゝ如くである。この時程ベーツ先生が強く我々の手を握つて下さつたことはない。



小泉又三（貞三）「学生会の思ひ出」、『関西学院学生会抄史』、1937年、142-145頁。1932年に高等商業学部を卒業した小泉は、のちに経済学部、商学部教授を務めた。

◆おしまいに、長年、ベーツ家に献身した北村きくえさんの思ひ出をつけ加えておこう。

「御主人様、それは、それは、よく奥様のご看病をなさいまし

た。食事のお世話はもとより、お風呂の世話までしていらつしやいました。もちろん夫婦ゲンカなどされたことは一ぺんたりとも見たことはありません。朝早く起きて大きな声で讚美歌を歌われ、聖書をお読みにになりました。よくお勉強されるにも感心しました。時間に、ゆとりのある時には、よく絵をおかきになりました。日本の土地では仙台がお好きで、松島の絵をたくさんかいていらつしやいました。お料理では、牛のシッポの料理、それからスキ焼きが大変お好きでいらつしやいました。暮しは、ほんとに質素でした。奥さんはなかなかおしつかりなされた方でした。口がおキケになりませんでしたので、指で、時計の針を示して知らして下さつたものです。」

坂本遼「忘れ得ぬ恩師、ベーツさん、怒りを忘れた人、病妻の看病十数年」、『母校通信』第13号、1954年10月、14頁。ベーツの妻ハティは、1934年、病のため半身の自由と言葉を失った。一家は仙台近郊の高山にコテージを所有しており、毎夏滞在していた。ベーツが描いた松島の絵は旧院長室に飾られている。



The Matsushima Islands



「ベーツ院長倫理学」高等商業学部卒業アルバム、1933年。

『学院史編纂室便り』第45号（2017年5月1日）

関西学院大学 学院史編纂室 〒662-8501 西宮市上ヶ原 1-1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>